

久種湖物語

むかしむかし、プウネトマリ（船泊）の大沢の部落に、元氣な男のふた子
が生まれ、ヌプリとイコツポと名付けられました。

やんちゃなヌプリとやさしいイコツポは、とても仲良くすくすくと育つて
おりましたが、あまりによく似ているため、親でさえときどき間違えるほど
でした。

二人が三歳になったとき、子宝に恵まれなかった部落の長、オテナのど
ろにも、女の子が生まれエリアと名付けられました。

ところが、エリアが生まれたころから、ヌプリの背中にあつた小さなホク
ロがだんだん大きくなり、両親はたいそう心配し占い師に見てもらふことに
しました。

「親御さんや、大変つらいことを言うようだが、このまま二人を育てれ
ば、ヌプリは必ず災いをもたらすだろう。ヌプリを島から遠ざけ、イコツポ

とは会わすことなく育てなされ。」

両親は、こんな幼子を島から遠ざけることはあまりにもかわいそうで忍び
ないど、占い師の言葉に反して、島の南、トンナイコタン（香深）に嫁いで
いる姉のところにくれてやることにしました。

子供のいなかったトンナイの姉は、プウネトマリに立ち入らせないことを
条件にヌプリをもらいました。

泣き叫ぶヌプリが、伯母たちに慣れるまでには長い時間がかかりましたが、
大切に育てられたため島の北と南に離れた幼子はそのうち少しづつお互いを
忘れながらも立派な若者に成長していきましました。

ヌプリもイコツポも十八回目の春を迎え、エリアも十五回目の春を迎えて、
成人となった年のある日のことでした。

ようやく自由に出歩くことを許されるようになり、オシヨンナイの海岸で
ほかの娘たちと一緒に貝をとっていたエリアは漁を終えて帰ってきたイコツ



ポに初めて出会いました。

雪どけの水が春の夕陽をたくさん吸い込んで、キラキラ光りながら流れる大沢の河口で、二人はしばし時を忘れて見つめ合いました。

二人が恋に落ち、だれよりも互いを愛するようになるのに、多くの時間は必要ありませんでした。

一方、ヌプリもトンナイではいちばん漁をする若者になっていました。自由を許されるとどうしても行ってみたい所がありました。それは、幼いとき兄と引き離され、わけも告げられず入ることを許されなかったプウネトマリの部落でした。

雪どけが終わわり、短い島の春をいっせいにうたうように花が咲き出すころ、我慢できなくなったヌプリは、プウネトマリに行ってみることにしました。

朝早く船をこぎ出しウエントマリに船をつなぎ、山越えをしてプウネトマリに入ると、太陽はもう頭の上まで来ていました。

「親のことも兄のこともほとんど覚えていないのに、何だかとてもなつかしい気がする。」

そう思いながら、何かに引き込まれるようにオシヨンナイの浜辺にやってくる、そこには漁を終えて帰ってきたばかりのイコツポがいました。

自分にそっくりの相手を見たたん、二人は同時に口を開きました。

「イコツポかい？」

「ヌプリかい？」

感じることを言葉にする必要もないほど、短い会話で二人は分かり合うことができました。別れて暮らした十五年の歳月が、またたく間に埋められていくように、親のことや漁のこと、将来の夢や恋人のことなどが次々に語られていきました。

そして、イコツポの話から、ヌプリは占い師の言葉でこの部落に立ち入ることが許されなくなったことを知りました。イコツポは、災いをもたらすこと

聞かされてきたヌプリが、自分を一番知ってくれるすばらしい兄弟であることを感じるのです。

若い二人には、占い師の言葉はうそのように思えました。

しかし、イコツポに連れられて、自分が生まれた家まで来たヌプリを迎えたものは、涙ながらに語る実の親の言葉でした。

「なんと恐ろしいことだ。ヌプリよ、どうか早くここを立ち去っておくれ。皆に災いが降りかからぬうちに。」

取りつく島もなく、悲しい気持ちで家をあとにしたヌプリに、「心配することはないよ。ぼくたちがずっとこのまま仲がよければ、今に分かってくれるさ。だから安心してまたこの部落に来たらいい。」

とイコツポはなぐさめるのでした。

イコツポに送られて、オシヨンナイの海岸を歩いてきた二人は、娘たちと一緒に貝をとっていたエリアに出会いました。

エリアはあまりに似ている二人を見てびっくりしましたが、すぐにこのたくましいもう一人の若者が、いつかイコッポから聞いたことのあるヌプリなのだと分かりました。

「初めましてヌプリ。同じ服を着ていたら私も間違ってしまうわ。まるでイコッポが二人いるみたい。」

はにかみながらほほえんでいるエリアを見て、ヌプリもまたエリアの美しさに目を見張りました。

トンナイに帰ってから、ヌプリは実の親や育ての親を悲しませないためにも、もうプウネトマリに行くまいと考えました。しかし、いつもの暮らしにもどって何日かたつと、彼もまた自分をいちばん理解してくれる友だちが、イコッポであると感じるようになっていました。

それに若く力あふれるヌプリには、自分が災いをもたらすなどという占いの言葉だけで、プウネトマリに立ち入らないことなどはできるはずもな

かったのです。

イコッポとの会話はそれは楽しいものでしたが、何度かプウネトマリを訪ねるうちに、ヌプリはイコッポと会う楽しみよりエリアに会えることの方が待ち遠しくなっている自分に気付きました。エリアのことを考えるだけで、心臓は高鳴り、眠れない夜を過ごすようになっていたのです。

「どうしてぼくより先に、イコッポと出会ってしまったのだ。このぼくだってこんなに君を想っているのに。」

苦しんだヌプリは、ついにある日、エリアに自分の心を打ち明けました。

打ち明けられたエリアは、驚きと喜びの中でイコッポの優しさとは違うヌプリのたくましさにひかれていた自分を罪深く思うのでした。

エリアの心を知り、ヌプリはイコッポに自分の気持ちを打ち明けましたが、エリアを譲ることなどイコッポにできるはずがありません。

二人は、家族のためにも漁の多さで決着をはかることにし、エリアも思い

悩んだ末、漁の多かった方へ嫁ぐことを承知しました。

しかし、漁では島で一、二を争う二人だったので決着はなかなかつきません。このままではどうにもならないと、エリアには知らせぬまま、二人は命をかけて闘うことにしました。



た。

リンドウの花が咲くオシヨンナイの沢のほとりで、激闘の末ヌプリがイコツポをたおしたのは、この年八度目の月が満ちた夕べでした。

「ヌプリ・・・、ヌプリ・・・」

イコツポが最後の言葉を残して足元に崩れこんだ時、



ヌプリは我に返りました。

「私は何ということをしてしまったのだ。イコツポ……。イコツポ！」

「……。ようやくやく会えた兄弟だというのに。自分さえ、この地に足を踏み入れなければ何も起こらなかったものを……。」
こうこうと照る月のもとで、ヌプリは後悔の想いに何度も襲われながら泣き続けました。

やがて、意を決したようにゆっくりと立ち上がったヌプリは、自分の剣を天に向けて叫びました。

「天よ、この愚かなわれを召し給え。」

悲しみの声は雷雨を呼び、稲妻がヌプリの頭上に光った時、剣は大きく輝いて彼はイコツポのかたわらに倒れました。

胸騒ぎをおぼえ二人を捜しに出たエリアの見たものは、既に息絶えたイコツポとヌプリでした。

「私はなんと愚かな女でしょう。自分の心の迷いから愛する二人を失って

しまうなんて。」

二人の間に泣きくずれたエリアは、やがてイコツポの手に握られていた剣を取ると、自分ののどを突き、二人の上に折り重なるように倒れました。

強い雨はますます激しくなり、沢をみるみる埋めて三人を包み込み、大きな水たまりができました。

何回かの春を迎えるうちに、水たまりは種々の花に囲まれた湖となり、魚が住み、鳥が遊ぶようになりました。

いつのころからか、この湖は幾久しくこれらの花を咲かせ続けてほしいという人びとの願いを込めて、「久種湖」と呼ばれるようになりました。

今でも久種湖は毎年春になると、エリアをいとおしむように数かずの花が咲き乱れ、イコツポやヌプリのかなえられなかった恋の心をいやすように美しい山鳥の声が響きわたっています。